

美しい惑い

秋野一之

青山ライフ出版

美しい惑い 目次

補遺	351
追憶 —エピソード—	281
惑い	217
より緑に	145
望み	77
春	5

春

春

美しいものは数多いけれども、それを限定するのはむずかしい。美しい源が掴めないのです。幼い頃に誉められた行いは美しい、初めて接した寛大な大人が美しい、とても自分に出来そうもない技術を持っている人が美しい、器量の美しさ心のやさしさに至っては、言うに及ばず、異性も美しい一つです。器物の美しさから風景の美しさ、きれいな花、それにこれ等を洗練、抽象化した芸術は美の極点に値するのです。そして終りには哲学の世界に超越するのですが、私はそこまでは踏み込めませんし、私の魂らしい或るものを慰めてくれるとは思えません。惑いが内側から私を崩そうとするのです。仕方ありません。惑いこそ美しい根源で自分を支えもし、励ましもしてくれる恋人であると考え決めようとしています。ですから当然、彼女は相手を悩まし楽しませ、世の情人同様に地熱と破壊力を抱蔵していると想定していねばならないのです。

考えようによつては、美こそ苦しみの源かも知れません。美しい風景を眺望しようとアルプスに登り、他人の好意に報いようと肉体を消滅し、あるいは恋心に現を抜かすのです。美を求めて真理に達したりもするでしょう。文学する心もそんな奥深いところに根を定着させていると語る

評論家もおり、真理の言葉がよく用いられる如く、美も常に文人、知識人に好まれる文学である。でも現実には自分の足で又は肌で、いわゆる己の全体を一つの塊りにしてしまつて理解するとなれば、至難の現実性を帯びた相手ではなからうか。美しいものは美しいと認めるしかないと言つて作家もおりますが、それはそれなりの体験があり真理を見抜いたのでしようが、そう言えるのはやはりその人の魂の奥から湧き出るのであつて、他人の言説を幾ら読解に努め、そのまゝ他人の体験を再現してみても恐らく失敗するのが落でしょう。共通な美意識がそもそも知識であつて各自にとっては無形で、体験した美しさが現実であり、すぐそこにあるのとは大変な相異と思つては、
です。

里君のようにくどくど語るのはいけません。私には美は惑いではないのですから、本当の美しさが誰でもいいのです。姿、行為のまゝ、私の肉体に透み入つてないのです。私はすぐ創ろうとする癖が働いて、現実の美しさを追い払つてしまい、私の想像に思考を委ねて、せっかくの女神を失つてゐるのです。

ですから創ろうとする私の悪い欲望、実はこれこそ私の生きがいなのですが、そいつに遠慮してもらひ現実を映してみたいと思つたのです。その意味は私が作家の卵である簡単な説明でことが済み、女神は私の作品ではないことの言い分となる。いいえ、その方がずうっと増したからです。

例えば砂山三沙代を創造の世界に載せるならば、立派な作品が生れると思つた。普段は口数が

少なく服装は質素ながら、どこか自分は自由である、衣服は無駄な全身仮面で自分を平穩にくれてはいる、と語っているのが私には読めるのです。それ故彼女の仮面を脱いで作品の上で活動してもらえるのです。あの顔の複雑さ、理知を秘めている悲愴の面には彼女の本性が露顯されている。ドイツ人に多い鼻筋の隆起している型、アラブ的な目の窪み、古代エジプトの絵や彫刻に形象される髪の毛の厚い長いお下髪が、大体の彼女を象徴する特性である。彼女は不美人に近い並の女性なのです。

彼女は無気味な外貌を擁しているのであり、無口なせいでもより近寄り難い、いわば損の多い女性でしょう。彼女に求婚する男性はそれ相応の個性を持った人物でなければならず、堅牢な扉を幾枚も艱難に耐え打開かなければならないでしょう。彼女が話す折りは必ず含みを内容に折混ぜて、相手は如何ようにも解釈しうるふうに工夫されているらしい。応対者は勝手に彼女を右のよくな女と思いたがり、そうした理由は充分にあるのです。

もの腰はぎこちない。筋肉がかなり虚弱で、従って細く関節の部分が病的に動きが反動式バネ仕掛ふうに、丁度練り人形の手足が繰返すしぐさを想定すればいいでしょう。でも彼女の作法には寸分の狂いはなく、普段の身の置き方にも無駄が少ない。普通に遊び普通に他人と接している平凡にふるまう人なのです。

このように書くならば、砂山三沙代と言う女性がみつともなく付合はずらい女で、オールドミ

スになるのは受け合いと語る人は大半なのもわかるが、この表現はあくまで私の印象なのであり、私見なのです。まあ人物評に公的評価なんてのも滑稽なのですが、人物表現はいろいろに為され、同一人が幾面相にもなってしまうでしょう。その功罪は大きく利用方法では彼女を極刑に持たす場合もあり、比較的幸運を掴む率は稀で、悲劇となるでしょう。

かくの如く一女性が私にとって罪人になる恐れがあるので、砂山三沙代も女神として私達の前に映してもらわねばなりません。彼女こそ私の仲間なのですから。

里優は最初に私に何かを訴えたい胸の中をそれとなく持ち掛けた学生だった。「俺は不満持ってたんだ」と下校間に図書館前で言ったのです。その時は髪を右でがっちり握っていた。一日学校を休んだ翌日も「森口、よく出てるな。くだらん」と狭い廊下の掲示板を見ていると性分を現したものだ。そうです余分ですが、その他加わる仲間も私を森口と呼ぶので紹介しておきたい。私は森口順吉と言う者なのです。皆一応は学生なのでが養成所の一年課程なので年令も二十才以上、就職歴があったり、新卒であったりで、自分の進路を再考しようと思ったり企んだりしている若者の学級なのです。企んだりしている者はいいとして、思ったりの種類が何を思っているのか女神の判断に任かされるのです。

古代エジプト展が国立博物館で催されて、私も組の者、二年課程の学生に付いて行き、何千年もの昔の遺品に接したのは初めてなので押されながらの観覧にもか、わらず、一応は珍しい催物

に接した意義は認めたのですが、大して博識になったとも、そのすばらしさに圧倒されたとも感じなかったのです。芸術観賞とは当然異なる性質の催しですが、物知りのおもしろさぐらいの後味で我慢し、組の者が教室内よりは打溶けて笑ったりしたので私も改めて学生生活、しかも道端でだべったり、コーヒーを飲んだりの決まった行動に戻ったと、これにもどっち付かずの心境で、一日の授業を終えたのです。そして帰る頃に里君が今日も休んでいるのをふと思い返して、自分も学校に向う足が重くなった。

里はテキストを買うのにもこう言った。

「早や全部買うなんてまじめなのかな。俺は一、二冊ずつ揃えるつもりだ」

「マスの名残りですか？」

「森口もそうじゃないか、ここは窮屈と思わないか。これだから国の遺ることは嫌いなんだ」

「だって国とは関係ないでしょう。単に職業を身に付ける為なんだから」

私がカバンなんかをいじって中を開けたので彼は言ったらしい。私は上野の広場で休むのが好きだったのです。テキストは早く揃えるのが昔からの習慣で、高校生の延長みただとは本人が承知だった。別に規則には逆らいたくなくなかったのです。私大がマスプロであろうが、いい加減な学生が多かろうが無関係なのです。

「森口、女はどうだ。あそこを行くだろう。あんな女を見たらどんな連想をする？」

テキストの説明が終ると今度はこう茶化すのでした。私はにっこりした。彼はそれに対して加えた。

「女は空だよ。良く聞くだらう。女は穴っぽこばかりで空っぽだつて」

意外だった。私は女性に飢えているか問われるのだと口実を用意するつもりでしだ。実は困る質問の一つだった。

「でも幾らか失礼だね。皆そんなのを結構オアシスとしているのだからさ」

「キャバレーかい？」

「いや、僕は行かないよ。金が無駄だし、もったいい遊びがあると思う」

嘘も方便だった。彼に対しては適当と選んだつもりである。

彼が指摘した女は女学生ふうでプロポーションのいい人でした。服装が地味で一人の友と同行しているのも、とても似合っているのです。友が男性であっても私は魅力ある人と思ったでしょう。実は彼女ぐらいの女子学生は組に数人居るので、私は意識したくなかった。里君も口にしたので通行人を茶化すのはコンプレックスでもあったでしょう。

事実里のひやかしは洞察力に富む忠告でもありました。私は上野など動物園と茶屋ダンゴと御上りさんの代名詞と高をくくっていたのですが、若い受験生も入学が決まっている暦の上では、春に入学願書を提出しに上野の森に登ると、葉を落してはいるけれども木々をすかして眺める美

術館、博物館、頂点を森に一際長く地から天空へ貫こうとする無形な力がそこへ引っぱって行く文化会館等の壁が伺え、どうしても数年前に年令を逆戻りさせられたのです。この現象は受験日にも首を持ち上げました。森を何とはなく歩いている人々に比べ私は青春をより新しくする者に思えたのです。都会の森に住みたかったです。心理的と言いますかやはり哲学の経験から吐かれる片言に述べられた或る思想家の文句には、〃都会の中の孤独〃などともありますが、私は上野の森に於ける孤独性と青春への憧れがミックスしていたのかも知れない。ですから受験中は苦しみを忘れ欲びに満ちておりました。受験生は背広を着用し、色とりどりのスカートをはいたりオーバーを覆ったままの青年ですが、私は整服の高校生を想像してはりきっていたのです。

桜の花が散り、園内の植木があざやかな緑に被われて語り合い、若草がすっかり巧ち葉を隠してしまふと本当に園芸の美と自然の美しさが調和され、私は自ずと春の呼びかける声を聞くようになりました。博物館の前方に広がる歩道のベンチで空想し、樹木の陰でめい想に耽り、園内の美しさのみを追う日が度重なり、学校の空気から遠ざかろうとした。浮かれた心情などあてにならずとはうまい文句です。自分ながら浅ましい逃避に高尚な感覚を授けようと、もて遊んでいるのを薄々認めていたのです。異性に求められず季節の変化に憧れ、クラスの者とする距離を置くのが美德だと独断したのです。数日、数週間試みましたが徒勞で、学級の中に逆戻り、常に里君は私を誘うようになっていた。

図書館内の食堂内に彼がいた。

「おい！」

どうして女学生の多い席に一人いるのか不思議だったが、もう一つ空いているので誘われるままにした。

「図書解題の本、当分貸してくれんか」

「いいよ。でも席が違うので用を足さないでしょう」

「あいつがないと教授の奴いちいち説明するので話が見えんだらう。それで困るんだ」

「隣の人が持つてるじゃないですか」

彼女達は里君の話に耳を立てて笑った。でも一人として二人の会話に割って入ろうとはしないで、先に頼んでいた食事を彼女達なりの話題でゆっくり食べているのです。麺類なので上品に箸を取ろうとする心がけも私にはわかった。里は給仕が持つて来るのが遅いと煙草を先にふかしたりした。

「くだらん飯を早くせんかな。俺はずうっと待つてるんだ。図書館学みたいな奴だよまったく。くだらん講義なんかしやがっていつも眠くなるんだ。奴等、早く切り上げればいいんだ」

「そうかもしれない。僕が通っていた頃みたいだね」

同じ料理を注文したので彼の言いぐさでもって遅れると予想して同調した。

「くだらん者はくだらん所へ来るもんだよ。いい加減授業料をふんだくられ、追い出されたと思うと今度は時間だテキストだ肩苦しい学級だと来る。まったくあきれよ」

「そうだね。つまらんのは確かですよ。でも集まったのはおかしいじゃないですか。里君も僕だって、図書と御縁を結ぼうって言うんですよ」

「もつともだ。本と御相手しようとするんだから笑わせるよ。まともに本も買わぬ奴が他人様に本を世話したりな」

「それもいいでしょう。せめて他人に本ぐらいは読んでもらうためにね。それに大して気にしない方がいいことだと思ふよ」

私はやはり彼よりも女子学生に注意していたと思う。彼が私を仲間にしようと企んでいるとは考えなかった。里みたいな男は私とは違う意味合で孤独者なものと、私が一匹の山羊ぐらいならば、もっと野性的なニュアンスのある野兎でしょうが、すると彼は一匹狼になる。自由気ままに行動する男なのです。年齢二十五才、文化系出身です。

ようやくランチがテーブルに据えられると女子学生達は箸を放してハンケチを手にし、相互に気配りしつつ唇を拭いて早々に出て行った。

「奴等男嫌いだろうかな」

あっさり言った。心中はいざ知らず冷静に述べるのです。

「どうでもいいことですよ」

恥じらいも手伝って毒舌を中絶しようと努めた。同級の女性達は立ち去る際には私達を意識して笑顔を残していたのですから……。

それに彼女達は立派な大人達ばかりです。行動には相応の練達があつて然るべきです。

「そうかな。女は助平と思うのがいいよ森口。奴等には大きな声で言ったが、今度は音量を下げる」とその通りに独白めいて「奴等ここに来る以上、現状には満足出来なかつた女達だよ。全ての奴等が各々のコースに満たされなかつたのさ。そう言う女は強そうだが異性を求めている。性の相手としては勿論だが、とにかく淋しがり屋だ。男はどうしても必要だが担しどこか身近に居てくれれば良い。それでことが済む、淡い愛情がある一方、彼女のエゴイズムの頑具としても重要視し、大変な熱愛ぶりを發揮するのだ。彼女達は何をするにも男の存在を無視出来なくなり、彼女達は自分の男をこしらえる」

食事をそっちのけに話すので私は「うんうん」のなま返事で聞き流していたけれども独断的言辞にはっとした。

「あの人達の恋人は手作りの人形だつていいんだね」

食堂で、しかも別課程の年若い学生があちこちにおいて、関心を寄せられる位置を占めているのです。彼の口を閉じさせたかつたのですがつい余計に軽蔑するつもりで自己嘲弄に陥っていた。

割箸を折ってからも里は学級の不満を述べ、女に対して特に「遊びの延長だ」と愚痴りました。あげくはランチのまずさにも苦情を宣げる始末でした。

「わかったよ。僕がいつか伝えよう。ここの食事の内容が悪いってね」

「頭の回転がいいなあ。森口みたいな男があいつに話せば内容も良くなるよ。教室の女が森口を見る目が違うからな」

「どんなのだい」

的外れな指摘が多いのに厭になつて問い正した。答えは図書館入口に行つて教えてくれた。

「色男とも別だが真理を見つめているふしがあるんだよ。女ならば女の弱さとか、愛情なら飾りを取り払つたふうな性質を持っているんだよ。俺は今になって尋ねたい。森口は家庭の生活や学校の生活以外に生活がないか。たとえば自分だけの生活だ」

「僕に自分を除いた僕の生活があるのかね」

「生活は俗っぽかった。精神生活だよ。それは森口のみが温めている内生活、内面性の寛ぎだよ。そんな内情があるんだろう」

黙るのが一番得策でした。彼の推察は当たっているが時期が早く、彼はまだ友達の域になつたのです。口が軽過ぎ、彼の行動は無軌道にプラスごろつきみたいでした。なじり屋ではあるけれども、リーダーには思えなかつたのです。彼もそれを望んでいないかに見え、私は無論双方共

に御免でした。

里のおしゃべりは邪魔ですが、私達のたわ言を耳にしてくれる人が居りました。それも時の経過が仲をとりもちました。

私達が決まって食事をとる図書館は古い歴史があり、私達や一般には上野図書館として親しまれている訳ですが、諸種名称も変更を重ね、現在は国立図書館分館として、その古風さ地理的位置から申しても、風格は天下一品の価値があると個人的には思っていました。図書館の使命を再考するまでもないのですが、私の頭には図書館の像がそんな形象で理想化されていたのです。大学にもやや古く、こんな型を匂わせる時代の差が残っていたのです。それにさえ図書館の印象が強く、そこで勉強している学生をそれとなく魅せられている人間に思ったものです。他の大学で新築した図書館にも入りましたがアカデミックに欠ける印象が強く、入館生は中でたべっているんじゃないかと疑ったりしました。学習室の役割を果たしている中、高校生の図書室とは使命が違ふべきかに決めていたらしい。

隣りにある上野図書館がどこか私の奥に秘むそれにぴったりだったのは確かです。緑の樹木を周囲に配し、三階程度のコンクリート建造物ではあるのですが、夢を授けるが如く均整のとれた雄壮さ、又はバロック的でもある装飾が語る悪魔性の魅力、古色蒼然とまではいかないのですが、所々壁のコンクリートが黒ずみ、かびや微細な苔が寄生して、永らえた年月を訴える力もあるの

です。

鳩がよく飛び回り、その糞の跡も作られた物質と生物の一つの相違を教えてください。糞の跡が鳥の生息と気持の連がり盛りに立ててくれるせいです。そんなきたない排泄物が胸に迫るのは、或る建物の形状によってなのです。学習好きか研究者が居る館内とその外部を、時代の流れもかまわず飛びかう鳩、そして上野の、特にこの辺りの静けさがずうっとこの一体の構造物を接近する者から遠ざけてしまう真昼の幻想が、脈々としているのです。

その魅力は筆力を超えておりました。私にはとうてい無理です。でも私は感じていたのです。そして取りつかれ、独り考えに耽り毎日表情を伺っては「これはすばらしい。これはいける」と眩しました。この感情は体内に染っていたままで、興奮が私の創作に転移出来ず、初恋のいたましい歓びとなって燃え続けていました。もう一度断っておきます。私に右のような遅速な青春の復活が当時あった事実を明確にしておきたいのです。

里君とともに近しくなった砂山三沙代もこの図書館が訴える若者への複雑なローマンを、我が胸に包み隠していたかはわかりません。

「古城の詩ってありますね。でも図書館の詩ってのは珍しくはない？」

どうして二人がはしゃいでいた時に突然詩について口を挟んだのか不思議でした。

「あんた詩を書くって言ったな」

里は背広の襟を掴んで、微笑した。彼はノーネクタイである。

「ええ書いてるわ。耳が早いね」

無表情だが口もとと頬がやさしい。

「同人に入っているのかい？」

「まあね」

「どんな程度かな。まあってのは」

「いいじゃありません。わたしの趣味ですものね」

彼女が私には教えようとしていたので、驚いたのと私が小説を書いているのも第六感で見抜いているらしいのが怖くもあった。うれしいと告白した方がいだろうか。彼女が同級生であるのは知っていたが性格とか趣味などどうだってよかったです。けれども、里君と一緒に肩を並べて草原に腰を下ろしている彼女に私は改めて一女性が近くに居るのを悟りました。

「いやすばらしい。詩人ってのはいい。俺はそういう人がいいね。俺達の組に砂山さんみたいな人は他にいないかなあ」

「いないでしょうきつと」

「なぜだ？」

「詩を書く目的で図書館の勉強に来たりしないでしょう？」

「それは一般論だね。論とは大げさだが誰でも考える奴さ。人は様々だ。気楽な稼業を求めに来ているかも知れんし、もう一年ぐらい遊んでやれと遣つて来た奴、女性が多いらしいんで適当に恋でもしようともくろんだのもいるだろう。まあこいつは馬鹿げているがね。俺なんかはもつと阿呆らしい。何かわからんで来てしまったんだよ」

「でもいいじゃない？ とでもすてきだと思うわ。無目的から出発するのは一番可能性が広く大きいんですもの」

里には逆らわぬつもりらしい。額をそつと中指と人さし指でさすつた。
これは私の思い違いでした。

砂山三沙代は積極的になり、むしろ彼女が里を引き入れようとするかの如く話しました。

「里さんの考えはいけないわ。皆それなりの個性があり、幾らか強いんですから、むしろほめられるべきですわ。わたしのは別として遊び人は独特に学園で遊ぶといいいのですし、恋愛などすばらしいんじゃないかしら。一カッブルくらいは生涯の恋をしてもいい筈よ。わたし予感がするの」
「これはまいった。砂山さんがこんな大胆な意見を吐くとはな。俺は好きになった。砂山さんが居なくちゃ始まらない。俺はどうもあんたみたいな人がクラスに隠れておつて、頭をもたげてくれるのを期待してたんだ。おい森口！ どうしたんだ聞いているのか」

黙っていたかった。陰気な感じのする彼女が活発に冗談混じりに語る文句は頂けないのでした。